

公一人残らせ給ふ此人を助置奉りなばまことに佛を造りてまなこを入ざると云がごとし。○  
略

〔狂言全集〕下 鐘の音

誠に世話にも、建長寺庭を、鳥箒ではいたやうと申すが、隅から隅に塵が一つ御坐らぬ。○  
略

〔養草〕昔信濃國善光寺近邊に七十にあまる姥ありしが、隣家の牛放れて、さらしおける布を角に引きかけ、善光寺にかけこみしを、姥おひ行きはじめて靈場なることを知り、たびく參詣して後生をねがへり、之を牛に引かれて善光寺參りといひならはす。

〔嗔囊抄 十一〕万燈會トテ多火ヲ燒ヲ、俗人常ニ由緒ヲ尋ヌト云共、未ダ其所由ヲ不知、其義如何。○  
略

大師是程ニ誓願シ給、豈少功德ナランヤ、サレバ世流布ノ詞ニモ、長者ノ万灯ヨリ貧者ガ一灯共申メリ、譬バ、阿闍世王、佛ヲ迎ヘ奉テ說法アリシニ、夜ニ入テ歸リ給ヒケレバ、王宮ヨリ祇洹精舍マデ、十方國土ノ油ヲ集テ、數万ノ火ヲ燃シ給ヒケルニ、貧女是ヲ隨喜シテ、兎角營錢ヲ二文尋得テ、油ニ替、火燃タリケル功德ノ故ニ、卅一劫ヲ經テ、佛ニ成テ、須彌灯光如來ト云ベシト、世尊告給ヘリ、是ヲ云ナルベシ、

〔清水物語 下〕老人きいて、よき不審にてこそ候へ、あると申せば、鱈のかしらも佛になるなど、思ひて、木のきれ、石のかけも、たうとみすぎて、おろかにあさまし、

〔諺草 伊〕諺 海鱈の頭も信心から この諺に似たる事、風俗通に載たり、○  
中 右の意は、醜魚を神なりと信仰して、病を治し、福を得しと也、いはしの頭も信じからといふも、これと同意なり、

〔ねざめのすさび 三〕ふるきことわざ 世に鬼にかなぼうといへるは、ちかき頃より、いひならはしたるかとおもひたるに、花鳥餘情に、鬼にかなさいぼうとか、せ給へり、